大倉流金春流
高安久兵也元

囃子大成

別之巻

182
399

182-399
1200901397436

宗家書藏

大倉流幸流小鼓
高安流葛野流大鼓
金春流太鼓手附
觀世流謠曲

囃子大成

別之巻

182
399

緒論

既刊雜子大成春夏秋冬四巻の内太鼓ものに屬するものは、觀世流太鼓を相手として之れに大、小鼓の夫々の手附を對照記入したるものにして、該編を以て觀世流謠曲に關する雜子の殆んど全部を網羅せるものと云ふべし。

然れども金春流太鼓の相手方手附までを對照記入することは、頗る繁雜にして到底其目的を達す

帝國圖書館藏
大正15.11.15
内交

ること能はず。為に今回更に囃子大成別巻として、金春流太鼓の相方を目的とせる本編を刊行せし所以なり。而して本編記載の太鼓手附は、當流宗家たる金春林太郎氏が自ら記入せられたるものなれば、何れも現代の觀世流謠曲に適應するものにして、且つ正確なるは勿論なれば茲に同氏の勞を多として特記す。

又大、小鼓の相方は、觀世流太鼓相手の手附と同一のものもあれども、大部分は別個のものなるが故に、何れも全般に渉りて遺漏なく編纂せり、庶幾は斯界研究者これによりて薀奥に到らんことを。

大正十五年三月

著者　田崎燕亭識

182-399

凡例

一　本書の謠曲節附は檜版大正改訂本に據りて訂正せるものなれども、著者の意見によりて多少相違する處もあり。

一　拍子上に關する間を漏れなく記し、殊に第七拍に當る持合（モチアひ）の場合には、「ゴマ」節の内側に「く」の如き記號を附して之れを明瞭ならしむる等総て遺憾無きを期したり。

一　鼓、太鼓の手附排列法は、本文謡曲の右側にて黒の(一)あるものは高安流大鼓、同赤の(一)なきものは大倉流小鼓なり。又同左側にて藍の(一)あるものは葛野流大鼓、同藍の(一)なきものは幸流小鼓、同赤の(一)あるもの及び赤の「・」(天)等は金春流太鼓なり。

一　本書以外の大、小鼓の合ひ方(アカタ)は総て既刊春、夏、秋、冬、の各巻と同一なり。

一　手附の中にて特別のものは粒附を記入する必要あれども、各流に渉りて記入することは不可能なれば多くは畧したり、されば其詳細は地拍子附謡曲本并に同別巻(近刊)に就きて研究せらるを便利なりとす。

一　拍子に合はる謡、例令へば一聲後の如き所の手附は大畧を記したるものにて、謡方の長短の關係にて多少の異同を生ずる

ものなれば、これ等の詳細も地拍子附謠曲本別巻に就きて研究せらるべし。

大倉流・幸流小鼓
高安流・葛野流大鼓
金春流太鼓手附
觀世流謠曲

囃子大成 別之巻

目次

内之部

高砂 一　鵜飼 二
難波 三　紅葉狩 五
老松 六　白樂天 八
融 九　養老 十
竹生島 十二　阿漕 十四
志賀 十六　誓願寺 十七
蟻通 十八　遊行柳 十九
玉井 二十一　杜若 二十四
安達原 二十五　賀茂 二十七

西行櫻 三十
吳服 三十一
葛城 三十三
當麻 三十五
海士 三十七
鞍馬天狗 三十九
龍田 四十一
雲林院 四十二
春日龍神 四十三
皇帝 四十五
山姥 四十七
氷室 四十九
善界 五十二
船辨慶 五十四
右近 五十七
大會 五十九
三輪 六十三
猩々 六十四
白髭 六十六
小鹽 六十七
邯鄲 六十八
唐船 七十
弓八幡 七十一
羽衣 七十二
龍虎 七十三
葵上 七十五
輪藏 七十六

以上 四十五番

外之部

寢覺 一
江野嶋 三
代主 六
九世戸 七
逆矛 十
西王母 十三
道明寺 十五
嵐山 十七
卷絹 十九
鐘馗 二十二
項羽 二十二
熊坂 二十五
野守 二十六
張良 二十八

羅生門(綱)三十二　鐵輪　三十五
藍染川　三十七　車僧　三十八
吉野天人　三十九　大瓶猩々　四十
鶴亀　四十二　和布刈　四十三
大社　四十五　東方朔　四十九
第六天　五十一　舍利　五十三
小鍛冶　五十五　合浦　五十七
六浦　五十八　松山鏡　六十
金札　六十一　岩船　六十三
絃上　六十五

以上　三十三番

別能之部　番外之部

淡路　一　室君　二
碇潛　三　枕慈童　五
飛雲　六　放生川　八
須磨源氏　九　胡蝶　十
一角仙人　十一　三笑　十三
藤　十五　雨月　十六
國栖　十八　雷電　二十
繪馬　二十　現在七面　二十三
昭君　二十六　菊慈童　二十八

以上　十八番

高砂

大小合方観世流
太鼓と変りなし

（内一）

●囃子 二ノ丸よりも 三人上ル 特殊

高砂や。浜の松。浜の松。

（鼓ヲ取ル）

浜の松。浦舟に帆をあげて。月も出で

汐の。波の。淡路の島陰や。遠くな

（ヒキ）

る尾の沖ふけてはや住の江に着いて

（ヒキ）

けりはや住の江に着いてけり

（ヒキ）

（ハ）

（脇能ニ出ル）

（ヒキ）

（ヒキ）

（ヒキ

と君はゐらずやみずがきの久しぶ
きぬぬの神かぐら。よるの鼓の拍
ゐを揃へて。すずしめ給へ。宮づこ
たち西の海。あをきが糸の。浪ま
より。あらはれ出。神松の。玄
なれや。陸の雲の朔かがた。なまも
かるなる岸陰の。松根によりて
腰をすれば。千年の緑。手にみ

（内二）

鵜飼　大小合方観世流
太鼓を変りなし

てり。梅花を折てかうべにさせば
二月の雪衣にたつ　神舞
待謡　当ク　河水の石をひろひあげ。河水
の石をひろひあげ。嫁成法の経を
一石に一字。書つけて。浪向に流め弔
らはば。なぞ。かはうかまざるべきなぞ
かはうかまざるべき。星薗　後シテ上
失地獄

遠きにあらず。眼前の境界。悪鬼外になし。柿かの春。孫年の昔より。沼河に漁して其つみ。おびたたしざれば鉄れ。ずと盡し。金紙とよ。ごす事もなく。妄闇の廊に。陸罪すべかつと。僧一宿のくりきに引れ。急ぎ仏前におくらんと。悪鬼心をやはらげて。船舟を弘誓の。船になし

難波

（内二）

法華の法の助け舟。かがり火も。ほのけ。きかな。迷ひのおほきぼ。雲も。「炎相の風あらく吹て。千里が邪も雲はれて。真如の月や。出。ぬらん。

雅子。「入て。寄す。花のしたゝ。更る夜。の。花のしたゝ。更る夜の月

影もに隈なる。氣色にそみ
て音樂の。花に風ゆる。ふ
きさよ花に風ゆるふきさよ

出端二段トモコイ合
誰かいひし。夏の色は。東より
來るといへども。南枝花初て開く。
夏は西も西の海に。白よ雜彼の夏
の夜の。月雪も澄む浦の浪よ
るのよがくは面白や夢ばし覺て給
ふなよ。是は雜彼の浦に年をへ
てひらくる代代の惠みを受る。本の
花咲や姫の神垂なり。我は示
百敷國より汎國に渡り。君をあが
め國を守る。王仁といつ。根人なり
むかし。仁德の帝宮には。帝代の鏡
の影を寫し。治まるみよの。榮花
をなしも。汎花の白ひ。また開

くるてとのはのみどり

かぜならぬ。遊び戯れ。色色の業

樂。あもーろや 梅枝に来居

る鶯。袖かけて なけば春風

ふるき鼓の。若むして。おちなら

す。おちならす。人もなければ。君が

代に かけし鼓も 時分のわ

り きむる風。彼の 鐘も響き

浦はうしほの 浪の聲聲へに

の松風 村雨の 紫あと

を風もよろてびの。かんて若むし

彼の島も。あどろかぬ代なり。有

がたや 神舞止メ謡及チ切

あらたまーや我ながら。色の酒の

醉心。まどろむ 夢もなき中に。あ

紅葉狩

（内二）

らた成げる夢の苦と地上に敷く枕に
雷火乱れ。天地も響き渡をちこ
ちの。たづきもしらぬ山中に。わぼつ
かなしや恐しや。ふしぎや今
迄有つる女。ふしぎや今迄有つる
女。敷敷仕堂の姿と顕はしあるひ
は岩ほに火焔を絞ち。または虚空
にほのほをふらし。感陽宮の
煙の中に。七人の扉風のうへに
狐。解りて甚たけ。此の鬼神
の。角はかぼく。眼は日月面をむ
くべきやうぞなき。舞働手次手返。これも
ちかもきわがずして。惟揉す
こしもさわぎ給はず。南無や八幡
大菩薩と。心に念じ。鉄をぬいて
徐かけ給へば。微塵になさんと

（地アラシムスビアシライ）とんでかかるを。（チ切）（チ切）怒ちがひむずとく（上ヨリ）（ヤ）ムスビ段ク（ヲ）（ヲ）

（ウケ）（ウケ）みゝ鬼邪のまんなかさし通す所（ヲ）（ヲ）（ヲ）キヲロシ（ヲ）（ヲ）（二段）（二段）チ放

（シカケムスビアシライ）と頸をつかむてあがらんとするを（上ヨリ）（ヲ）高刺ムスビ段ク（チ切）（ヲ）（チ切）（ヲ）（チ切）

（ウケ）（ウケ）切はらひ鈴べば鈴に恐れていはほ（ヲ）（ヲ）キヲロシ（ヲ）（ヲ）（初段）チ放（ヲロシ）（ヲ）（ヲ）（三段）チ放

（シカケムスビ段ク）（上ヨリ）（ヲ）（ヲ）ムスビ段ク（三段目）チヲロシ（ヲ）（ヲ）（三段目）キヲロシ

べのぼると。（チ切）（チ切）（チ切）（チ切）ぶれろしきさし通し忽

（チ込）（チ放チツメ）鬼邪をしたがへ給ふ。（チ込）ク チ込トメ威勢の程こそ（ヲロシ）（ヲ）チ放チツメ（チ込）（チ込）チ込トメ

（元）（元）（合ク）（合ク）あそろしけれ（止メアリ）（合ク）合ク

（内三）

老松

（鼓ノ取ル）（太）（チ切）（ヨ）（ヨ）（ヨ

そても（シカケムスビアシライ）久（シテ）社老木の若みどり（シカケ）（ツヾケ）（手切）（手切）

（地クロシ）（ウケ）
色すみわたる神かぐら（コイ合）（コイ合）（シテ）（甲ノ入）寄とう（上ヨリ）（八）

たひ。葬をまも（シカケムスビアシライ）（手切）ぶかくを偽る宮（シカケ）（ツヾケムスビヒ）（手切）（手切）

（ウケ）（ウケ二段）
者の。壱もみちたる。有がたや

（手放ヤツメ）（手込）（手込）（手放ヤツメ）（ヲロシ）（手込）（手込）

●仕舞 真之序 ノリ（シカケ）（手放ヤツメ）（手切）
止ル謡カケ 地と合はず（判上）（ツヾケ）（手放ヤツメ）（手切）（手切）

（シカケ）（ウケ）
●きすす杜の。きすす杜の。梢は（初段）（手放ヤツメ）
（手放ヤツメ）（手切）（手切）（ヲロシ）（手放）（初段ノベ）
（地）（地）（地）
学地たる合ル（ウケ）

（シカケ）（シテ）（八）（カン）（コイ合）
わか木の花の袖（上ヨリ）（ヲロシ）（中ノ）（中ノ）（コイ合二）
（シテ）（カン）
是は老木の神（三地）

（地）（地）（地）

にあらば沈舞楽の
鼓は浪
の音笛は龍の吟ずる聲。舞人
は沈の尉が老のなみの上にたつ
て。青海に深ひつつ。海青楽
を舞べしや
芦原の国も
動かじ。萬代迄
山陰
のうつるか水の青き海の
浪の
つづみの。海青楽
西の海。

あをきが原の。波間より
現
れ出し任吉の神。すみよしの
かみすみよしの
あらはれ出し。

任吉の
苔の

（内四）

融

待謡 磯松。苔の衣をかたしき。
苔の衣をかたしき。岩根の床に
夜もすがら。狂も奇特をあらや

そて。夢浦島の。極寝かなゆ
めまち島の極寝かな　出端越　後シテ上
れて年を経ぬるかと。ゐいにしへ
に恨る浪の。みつ塩がまの浦ぐの。
こよひの月を陸奥のちかの浦
わも遠き世に。其名を残す太
陸。融の大臣を我事也。我塩が
まの浦に心をよせ。あのまがきが

鳴の松陰に。明月に舟を浮べ。
月宮殿の白衣の袖も。三五夜
中の新月のいろ。ちくふるや。雲
を廻らす雲の袖　さすや桂の
枝枝に　光を花と。ちらす極
楽　愛にも。なに豆白河の浪
の　荒面白や曲水の盃。うけ
たりうけたり遊舞の袖

養老　（内五）

いひもあへねばふぎやな。いひ
もあへねばふぎやな。天より老い
かかやきて。龍の響も壱すみ
て。音楽聞え花ふりぬ。是唯
事と。思はれず是ただ事と思
われず　有孤や法まる此代の
ならひとて。お師菩提をだやかに
五日の風や十日の雨のあめがした
てる日の光り。曇はあらじ玉水
の。菜の泉はよも盡じ。莫有
がたのきずいやな　是とても
誓ひは同じ法の水。虫せぬ清
代を守るなる　我は汎やまゆ
我の宮居　又は楊柳観音堂
護　神といひ　仏といひ

「唯是水波の隔にて」「流せ紙」

度の方便の聲「峯の嵐や。

谷の水音そうそう」

を揃へて音楽のひびき。瀧津

心をすまつつ。諸天らいきよ

の。影向かな 神舞 「松陰に。和世を

うつせる。みどりかな

ぎよきゝ山の井の水。山の井の水

山の井の「水溜溜そして。浪悠

●仕舞 悠たり。おさまる「帝代の。君はふ

ね。「きみはふね。ほはゝ。よ

く舟を。漕べうかめて。ほよく君

を。あみぐ代そて幾久しさも

盡せじやつきせじ。君にひかる

る玉水の。かみ澄む時は。下も澄

ゝ瀧津の水の。澄きゝ立つ波の

返すがへすも。よき世代なれや

よき世代なれや。萬歳のみぢ

萬歳のみちに動く

りなん。

（内六）

竹生嶋

社壇の。とびらを押ひらき。殿で

へせ給ひければ。翁も水中に。

入かをみーが白波の立ゆり我は

沈海の。あるじぞと云捨てまた。

浪に入せ給ひけり。出端不越半藏ケ

伊勢

しきりに鳥動して。日月光り

かがやきて。山の端出るごとくにて。

弘れ給ふぞかたじけなき

抑是国。沈鳥に住んで神を敬

ひ国を守。弁才天と成。我事也

其時虚空に音楽聞え。其時

虚空に音楽聞え。花ふりくだる

雲の夜の。月に暉くしめの袂

（三段目）ウケ　ムスビニツヲドリチツメ

（ツレ）ムスビヒ

（ツレ）ムスビアシライ

（地）チ放

（地）チ放チツメ

（地）チ放

（地）チ放

（地）チ放チツメ

（地）チ放

（地）チ放

（地）チ放

神となつて。國ざをしづめ。ち

かひをあらはし。天女は宮中にい

らせ給へば。龍神は則湖水に飛

行して。波を蹴立て。ゑをかへ

て天地にむらがる大蛇のかたち

天地にむらがる大蛇のかたちは

龍宮に飛んでぞ。入べけ

る

（丙六）

阿漕（太鼓習）

（ロキ上ル 待謂 ヨク）いざとゝらはん救の。（救ヲ取ル）いざとゝら

はんかずかずのゝりの中にも一条の。

めでなる花のひもときて。苔の

衣の玉ならば。終にひかりはくら

からじ終にひかりはくらからじ

（出端不越 ヤコイ合 出端ハ二ツ二段 ヤコイ合 ヤコイ合）あまのかる。藻に住む虫の

我からと。音をとゝ泣かめ。世を

ば恨みじ。今宵はすゝ浪あ

れて。序膳の熟の綱はまだひ
かれぬよなよ。よき陰なりとタ
月なれば。宵よりやがて入り内の。
みちを変へ人目を。恐しのびにて引
綱の。沖にも。磯にも私はみえず。
性の水のみぞあごの滝。あこぎが
塩木こりもせで狂執心の。綱
置かん伊勢のうみ。濃き

潮のたまたまも
より浦のこゑ
狂心にはあみの。浪はかへつて。猛火を
なるぞやあらあつやたへが
たや
（内七）
志賀
太鼓を変りなし
いざけよは。玄の山邊にまじ

なん。（鼓ヲ取上）（手切）（太）雲の山邊にまどりなん。

言なばなげの花の陰。月に孫

じてあまの原。時の調子にろつ（音出シ）（カンニ）

りくる。（キクヤケ）舞歌の聲（ヤ）（ハ）（ヤ）（ハ）こそあらた

（ヤヤドシ）（拍）

なれ舞歌の聲こそあらたなれ（ヤ）（ハ）（ヤ）（ハ）（ヤ）（ハ）

（内七）

誓願寺

大小合方観世流
太鼓を変りたし

十悪（コスヒ）の心邪（ヤ）のまよひの雲も空（ヤ）はれ。浄（ヤ）の月の西方も。爰（ヤ）を去事遠からず。住心の浄（ヤ）土とは此誓願寺をおむなり

（ヨロシ）（コスヒ）（コスヒ）（コスヒ）（ヤ）（ヤ）（ヤ

皆一同に。礼し給へば。あらだ
なりける。奇瑞かな。

蟻通　（内八）

（太鼓習）

猶も神忠をいたさん。有難や。神神
の色をすずむる事。私事よりもよ
ろしきはなし。其中にもかぐ
らを奏じひめの袖。返すがへす
もれもでしろやな。神の岩戸

の古への袖。思ひ出られて。

※立廻リナキ
（上ヨリ一コイ合）
私光同塵は縁のはじめ
（コイ合）

成道は利物の終
（刺）

神の代七代
すなほに人あつうして情欲
わかつるなし
天地ひらけは
ぢまりしより。雅歌のみちこそ。
すなほなれ
貫之が言
紫のすゑの。貫之が言紫のす

（地）長地
ゑのぬ風心を感ずる故に。（地）短地
（地）長地
（イ合）
かりに
（地）短地

（シカケステ）カケステ
（手）
（コイ合トリ）
姿を見ゆるぞとて。

遊行柳（太鼓習）（丙八）

（手カケリ久）
（地）
手飼の虎の引綱も。（手地）ながき思ひに
（ツヽケ）
（ツヽケ）
（ツヽケ）

の狩を返がへすも。上人の口法
をうけ。よろゝぶ新俳の舞も
•仕舞•是迄ありと。名残の名みだの
むにもぬける。玄の柳の い
とま申さんと。ゆふつきの鳥も
なき ゐれの曲には柳條
とわがぬ 手折はあをやぎの
姿もたをやかに むすぶは
老木の 枝もすくなく こと
しばかりの。風やいとはんと。ただ
よふ足もとも。よろよろわよ
わと。たふれふし柳かりぬの
涙の。草の花のひと狩の契り
も他生の縁有上人の口法。西
次秋の風うち拂ひ。雲も木
の紫も散散に。雲も木のはも

ちりぢりになり果て。殘る朽木
と。なりてけり。

（内九）

玉井

かくて三年に成ぬれば我國にかへりのぼるべし。海路のしるべ等
ならん　心やすく思召せ。わたづみの宮をもなだめて。海中の
宝物をまゐらせあり　大わだに
に乘ゞはやてを吹かせ。陸地に
送りつけやさん。甚だはまたせ

おはしませ端越光ちる。塩みつ
玉のおのづから。曇らぬ影。あ
みぐなり　おのおの玉を。捧
げつつ。おのおの玉を。捧げつつ。豊
姫玉依二人の姫宮。金銀わん
裏に玉をそなへ。るにさきげ。

り。彼釣を。侍ふ。わたづみのみや
(三段目)ウケ　(ヲロシ)　(手込)手放ヤツメ
辺。持来せよ。
(手込)ムスビ手込　(手込)(手)平柏子合はず　大悪　(手)上手込　後シテ　(ヲロシ)　(上ヨリ)ハ　ウケ　平柏子合はず
まうとの
君のめいに随ひ。わたづみの宮を
(コイ合)(コイ合)コイ合
てうしんを書て。天孫の市まへに。
(シカケ)(ツヒケ)手放ヤツメ
たてまつる。潮満しほひるふたつ
(手四)(手四)ムスビし　(ヲロシ)　(手込)手込　(手込)ムスビ手込　(手込)手込　(手込)手込
の玉を。潮満しほひるふたつの
(手込)(ヲロシ)(初段)ウケ　(初段)ウケ　(地)手放　(判)(手)手放
玉を。てうしんにおそへきさげ申
(ツヒケ)ムスビし　(手四)(手四)　(シカケ)ムスビアンライ　(シカケ)手放ヤツメ
す。葬礼をそうし。姫玉依。袖
(手)ウケ　(三段目)ウケ　(三段)ノル地　(ヲロシ)手放ヤツメ
を返して。葬。たまの天女舞
(手込)(手込)手込　(手込)ムスビ手込　(手込)手込　(ヲロシ)手放ヤツメ　(初段)ウケ　(初段)ウケ　(地)手放
何れも姫
(初段)ウケ　(ヲロシ)(初段)ウケ
も姫なる葬の袖。たまの天女舞は
(手込)(手込)手込　(手込)ムスビ手込　(手込)手込　(ヲロシ)(初段)ウケ　(手込)手込　(手込)手込　(手込)手込
なる葬の袖。たまのかんざしかつ
(判)(手)手放　(地)手放　(ツヒケ)ムスビ段ス　(シカケ)ムスビアンライ　(手四)(手四)
らのまゆずみ。月も照添る花
(三段目)ヲロシ　(ツヒケ)ウケ　(三段)ノル地　ヌキ
の姿。ゆきをめぐらす。たもと
(ヲロシ)手放ヤツメ　(手込)(ヲロシ)手込　(手込)ムスビ手込　(手込)手込　(手込)手込
かな。わたづみのみやを。舞働二段
(手)手返　(手)手返　(ヲロシ)(手)　(シテ)(地)(ヲロシ)　(手)手込　(手)手込　(手)手込

がり、左右に返す。彼もはなや
かに。あしぶみばかりとうと。指
をとそろへて時うつれば。るは清
庭を。立ちひ。かり絞へば秋に
すがり。わたづみの糸物をたて
まつらんと。五丈のわにて。糸を
り。三人の姫に。玉をもたせ。龍王
立ち来る。浪をはらひ。うしほを

（内九）

牡若

大小合方観世流
太鼓と変りかし

聽たて。はるかに送りつけ奉り
遥に送りつけたてまつりて。又
龍宮にぞ。帰りける。

まさや昔の春ならぬ我身ひとつ
は。もとの身にして。本覚生い
の身をわけ陰陽の神といはれ
しも。性業平の末ぞかし。か

様に申物語類はせ給ふな猿

（ル刺カケ）

（クヒ）

（ヲ）

（ヲ）

（ヲ

ずはや今社草木國だ。すは
やいまてそ。草木國土。悉皆
成佛の法をえて社。炎に
けれ。

安達原　（丙九）

ところもまどひ肝をけし。こと
ろもまどひ肝をけし。ゆくべき
方はしらねば。足に任せて逃げ
てゆく足に任せてにげてゆく
ここそさしもかくしし国のうちを。
あさまになされまいらせし恨やし
に来りたりむねをこがすほのほ。
感陽宮の煙ぶんぶんたり聖
風山風吹落て　なるかみ猶
妻天地に満ちて　ふかきくもる

雨の夜の鬼一口に喰はんとて歩
みよる足音ふりあぐる鉄杖の
いきほひあたりを拂ておそ
ろしや東方に降三世明王
南方に軍荼利夜叉明王西
方に大威德明王北方に金
剛夜叉明王中央に大日大聖
不動明王咬竜咤嚕咤嚕旋荼
利摩登抳。竜阿昆羅伽欠
娑婆訶。伽多羅吽千籍

賀茂

（内十）

はづかしや我姿。はづかしや我姿の。
真をあらはさばゆまやなあさま
にや叱なんよ名詐はしらまゆみの。
やどとなき神ぞかしと。ゆうてで
にえまぎれて神がくれに叱にけ

りや。祢がくれになりてけり

荒有秘のをりからやな。我

汝みやゐに地をしめて。法界無

縁の衆生をだに。ふるそれば

しみそなはすみ祢やの祢徳あ

ふぐべーやな。くもらぬ代を。

守るなり

まもるべー守る

べーやな。君のめぐみも今汝時

晴いたるなりときいたる

感應あれば影向微妙の。

嬉花園のあたりに。ありが

たや。天女舞

か義のみなみたらし

の陰。かぎのやまなみたらし

の陰。うつりうつろみどりの袖

と。水にひたして。すずみとる。すず

みとる。鬱とるほすず祈から

に。山河草木動搖して。国のあ

たりなるわけいかづちの。神体来

現し給へり。我は是。王城

をまもる君臣の道。雷の神

て。虚空に飛行し。又は国土

を至位の方便。和光同塵結

縁の姿。あら有がたの御守やな

●仕舞　舞働三段　半太鼓　辺

風雨随時の御ろらの雲斗。

風雨随時の御ろらの雲斗。

雷の雲きりとうがち。

稲妻のいなばの露にも。

る狩だになるいかづちの。

雨をお

ほろほろとどろとどろとふみとど

ろかす。なるかみの鼓の。時も至れ

ほろほろ

てふりくる足音は

ば五穀成就も國土を守護し
治まる時には法徳と。威光
を形しれはしまして。衆徒の
祈は。紀の森に。花去花去い
らせ給へば移立ちそ。みや。雲き
りを。誘いかづちの。祈もあ
ま路によぢ上り。祈も天路に
よぢの登りて。虚空にあがらせ
たまひけり。

西行桜　（丙十）

うきせをいとひし花乃山。わ
しのみやまの花の色。かれに
し。つるのはやしまで思ひし
られてあはれなり。清水寺
の地主のはな桜。咲くかせの音
羽山。ここはまた嵯峨。戸無瀬

いれつる。瀧津なみまでも。はなは大井川。井せきに。をやかかるらん。すはやかずそみ時の。つづみ。夜の鐘の音。響きぞ。あらゐ恋惜の夜遊やなをゝむべしをゝむべ。得がたきは時。あひがたきは友なるべし。夫

霄一刻價千金。花に清香月に

かげ。春の夜の。花のかげより。恨めて。かねともまたぬ。われてそあれ。わかれてそあれ。侍てしばし侍て。しばし。夜は。まだふかきぞ。しらむは花の影なりけり。よそはまだ。小ぐらの山。陰に沈る夜ぞ。ぐらの。夜のまくらの

呉服

（内十一）

うれしきかなやいざさらば。浜松陰
れきかなやいざさらば。浜松陰
に旅居して。風も蕭くとらの時。
神の告をも傳らてこん神の告
をも傳らてこん嶺越ゆコイ合君が代
はあまの羽衣まれにきて。なつ
せつきぬ君ならなん。浮世に
八千よをまつの葉の。茂り失せず
して色は猶。まさきのかづらなが
き世の。ためしてひくや綾の絲
くもらざりける。時とかや
迎君のかしてき世ぞとゆ浪に
を御るはたゝのうちにきつ思の
袁たて添ゆる。はたの薮錦
字をあらはし。衣うつ巷のうへに。

怒るかの聲。松の風。又はいそ
つ波の音。しきりにひまなき
はたものの。そるや呉羽の手
ぐりのいと。我がそるはあやは
ふみ木のあしおと。きりはたり
ちやう。きりはたり。ちやうちや
うと。悪魔もおそる。聲
なれや。げにをりひめの。かざ

●仕舞 しのそで。思ひ出でたり織女
の。思ひいでたり織女の。たまた
まあへる。猿人の。夢の精霊
壹岐薩摩。影向ありたる夜
もすがらもすがら。たからのあ
やを織りたて織りたて。我君に
さしげもの。浦代のためしの二人
の織姫。呉服あやはのとりどりに

くれはあやはのもりのみつ
きはそなる所代そめでた
けれ

葛城　（内一十一）

岩橋の。苔の衣の袖添へて。苔
のころもの袖乾べて。法の道のも
ことばに法味をなしてよもすがら。
彼葛城の神でこそ。夜の行も老
澄みて一心敬礼。我葛城の
夜もすがら。和光の影にあらはれて。
五衰の眠を無上菩提の月にさま
し。法性生死の寶の山に法味を
かれて乗りたりよくよく動めおこ
しませ

よしや芳野の山かづら。かけ
て通へや岩橋の。たかまの原は

これなれや。神楽歌はじめて

大和舞いざやかなでん

ふる雪のしもとゆふばなのし

●仕舞 らにぎて 太鼓序・舞 ●たかまの原の祭

戸の舞 たかまのはらの祭戸の

舞。あまの香ぐやも白ひたへたり。月しろく雪しろくいづれも白妙の。けしきなれども。なに

わかつらきの。神の郎がたち

おもなやおもはゆや。はづかし

やぶ漕ぎ。あさまもなりぬべし。あけぬさきにとかづらきの。あけぬさきにと葛城のよるの。祭戸

にぞ入り給ふ。

待謡 いひもあくねば不思議やな。いひも

當摩

（内十一）

あ、ねば不思議やな。妙音(ムスビ)の光
さ。かゞの菩薩(ムスビ)の眼のあたり。あ
らはれ給ふ不思議さよあらはれ給
ふ不思議さよ。端越歩コヲ合(コイ合)二(ハ)佳今夢中に
顕れたるは。中將ひめの精魂な
り。我妻(コイ合)に有りし時。祢(ムスビ)償(コイ合)を
經。朝朝時時にをとたらず。俗心(コイ合)
なりし故に。微妙安樂の淤界の能
(ムスビ)

となり。本(キヲロシ)歩(ムスビ)出めの四服(コイ合)に産せ
り。しかれども。寔をさるゆ遠かず
らずして。法身(ムスビ)却來の法味をな
せり。有難や。盡虛空界の莊
(高判)

嚴は。眼は雲路にかかやき(コイ合)格妙法
(高判)ムスビ

輪の音聲は。聽寶剣の耳に滿て
り。蕭然とある曉の心(コイ合)に涼
(半判)

しき。道に引かるる光陰のてこ(コイ合)
(ツヾケムスビ段又)

もどしむべしやなを
時は人をも待たざる物と。見変
ぞ。唯心の弾丸。いただきまつれ
やいただきまつれや。拾取不捨
為二切世間。読此経修行之法。是
為。悪経
だにければ
信ずる事も難
かるべしとや。唯願めや。
の音。
の色色の法事。
光明遍照十方の京都を。ただ西
方でむかへゆく。法の舟のみ

●仕舞
一色ぞ。有がたや。後夜の鐘
の音。夜のかねの音。鳥鐘の
ひびき。称名の音。見仏聞法

なれ棹。市法の舩の。さほ挙く
るまの夢の。夜はほのぼのとぞ
明りにける。

海士　（内十二）

大小合オ観世流
太鼓を変りなし

さてはうたがひ所なし。いざそもら
はん法華の。こころざしある手向
さ。花の蓮の妙經。色色の善をな
し給へいろいろの善をなし給へ

出端　上歌
（出端ツヨシ）
寂莫無人聲
（平判）（地）平調さにさはず
（高判）ムスビ
後シテ三人　恐有孤の声
（コイ合）（コイ合）コイ合

とゝらひやな。法華經にひかれて。
五逆の達多は天王記別を蒙り。
（半判）

八歳の龍女は南方を垢出男にし
（コイ合）コイ合　（コイ合）コイ合　（地平行）（地平行）
（平判）（ツヾケムスビ）ムスビ段ツ
（平カケ押ハ乃）

うもをうくる。なほなほ妙讀し
（ツヾケムスビ）

給へべし。深達羅漢。
（コイ合）コイ合　（コイ合）コイ合　（地上）

思ひ十方。微妙浄法身。具
（ツヾケムスビ）
（コイ合）コイ合　（コイ合）コイ合

（シカケムスビ）ムスビ段ツ
（下リ四段）

相二十二。八十種好。用莊嚴法
（ツヾケ平）
（ツヾケ平切）ムスビ段ツ
（地上）（下）
（平切）（平切）
（ツヾケ平切）ムスビ二ツアドリ

身

天人所戴作。龍神感恭

（二段ムスビニツヲドリツメ）

敬あらありがたの。御經やな

（ヲロシ）（ヲ上）（ヲ送）（ヲ放ヲツメ）（ヲ送）（ヲ上）（ヲ上）（ヲ送）ムスビ ヲ込

●仕舞 イロ掛リ 早舞 ヲ込ヲ送ヲ込●

舞カリ数ヤリ留直リヲ六付刺舞ニナル

（ヲ上）（ヲ上）（ヲ上）（ヲ上）

今此經の徳用にて

（ヲ上）（ヲ上）（ヲ上）（ヲ上）

立かな 大意 止手込

後ニテ上 地ラヒシ ウケ

「柳見は。軸馬の奥

コイ合 コイ合 コイ合

僧ぼが谷に。峯へて。侍める。大天

ムスビ手込 手放手ツメ 手放手ツメ 手返 手返 手返

物なり

謡ノ手切 謡ノ手切 謡ノ手切 謡ノ手切 止メリ

「邊土においては 「地良」 「横川」

入直 撥

「わ意が嶽。

「我慢高雄の峯に

手返 手返

すんで。人の為にはあたでゐ。震

手返 手返 下ル刺カル

たなびき雲となつて 「月は

撥 撥 手返

軸馬の僧ぼが 「谷に充ち滿ち

中切 中切

峯を動かし。「嵐でがらし 「籠の音

三ツ重ネ 手放手ツメ

※難字には詞の終を省く

天物だをしは あびたゞしや

手込 手込 手込 止メナン

其でもくにわ上膚も 「そのでもくに

長地ツメ 長地ツメ

わ上膚も。さも花やかなる 「侍有さ

手カケ タムスビ 手カケ

まして姿も心もあら天物を

長地ツメ 手カケ四段目

「師匠や坊主でも賞。既は。 「いかにも

手返 手カケ ツメ 長地ツメ 撥

だ事をのてきず傳へて平家を詩

手カケ ツメ 手カケ ツメ

んと思ひすかややさーの心ぎーや

中切 中切 天一天

●仕舞

なんぼう武士の誉れの道

舞働二段　上歌上歌

●（ヨロシ）武士の誉れの道。源平藤橘四家にも取分け彼家のみな上は。清和天皇の後裔とて。あらあら時節をかんがへ来るにおで（高判）ムスビ段ノ

れる平家を西海にたつくだし。煙波滄波の源雲に花咲の自在を受て。かたきをたひらげ。會

（初段）ウケ　（初段）ウケ　（ヨロシ）ウケ　（初段）ウケ　（ヨロシ）ウケ　（ヨロシ）ウケ　（ヨロシ

つて。笑にけり。

龍田

（内十三）

去狂に夜神楽の。去狂に夜神
楽の。晴うつり事去てきねが鼓
も敷ゐて月も霜もしらにぎ
て。振りあげて聲すむや謹上
きいはい
久かたの。
月も落ちくる。たき物まつり

●佐舞
なみの。たつたの。神の清前に
神の清前に。初るはもみち紫
すゑはち赤のぬさ
龍田の山
風の。時雨降おそは
つの鈴の聲
それぞしらゆふ神風松かぜ
吹きみだれふきみだれもみぢ紫
教そぶ夕つけ鳥の。みそぎもぬ

さも。ひるがくるをみ衣。謹上

再拜、再拜、さいはいも。山伏

本。國土をさまりて。神はあが

らせ。給ひけり。

（合ル合ル）

（五ツアドリ）

思ひ出づるや二月の。たそかれ月も

はや入て。いとぞおぼろ物に。ふるは雪

雨か。落つるは涙かと。袖うち拂ひす

そを取り。引をしをすでずでそ。た

どりたどりも迷ひ行。思ひ出た

り夜遊の曲

返すまそでを。

●仕舞 月やしる 大鼓岸ノ舞 ●夜遊のぶがくも

ときうつれば。夜遊のぶがくも

ときうつれば。名殘の月もあ

のは袖。返すや夢のつげの枕。

物語。語るをつきず

（中切）

（コイ合）（ツケスエ）短地 ステル（コイ合トメ）

（短地）

春日龍神

（内十四）

（平上声）待議 神詭まさてあらたなる（歌ヲ取ル）（去）祈詭ま
さてあらたなる。聲のうちより
光さし。麦日の野山金色の。世
界と成て草も木も（中）（平）佛粹となる
（推）（ヒ）（ノ）（ハ）
ぞふぎなる（ハ）佛粹となるぞふ
（ヤ）（ヤ）
しぎなる（ハ）（半打出シ）
（半二段 歩打込刻返）（ヤ三歩ア）
（ヨイ合）
その非妙法蓮那羅王（ヒ）
（半ヤ）（ヒ）
また（ヤ）
持法蓮那羅王（ヒ）
（半ヤ）（ヒ）
（ツクス間）（ヒ）（カン）
樂乾闥婆王
（半ヤ）（ツクス）（カン）
（ツクス間）（カン）
樂乾闥婆王
（半ヤ）（ツクス）（カン）
（ツケ）
（地上）樂音乾闥婆王
（ヤ）（ツケ）
（推）（カン）
（ツクス間）（カン）
（地上）婆推阿修
（半ヤ）（ツクス）（カン）
（ツケ）
（地上）（片）
（元）
羅王
（ヤ）（ツケ）
（地上）（片）
（元）
（地上）羅候阿修羅王の。
（ヤ）（ツケ）（ヒ）（ヒ）（ヒ

るうな原や。沖ゆくばかり。月のみ

ふねの。さほの川づらにうかび出

●仕舞

れば。八大龍王舞働 歩交歩

つの冠をかたふけ。而は春日型の

月の三笠の雲にのぼり。嬰の型

守も出でて見よや。摩耶の誕生

鷲峯の説法。双林の入滅。てをでも

く終て是迄なりや。惠上人俗

入唐は。とまるべし。渡天はれ

仏に。渡るまで。俗佛跡は

寿ぬまでや。寿ぬても寿ぬ

てもいうべあらしの雲る新て。龍

女は南方に龍宮に行ば。龍神は猿

仏の池の青波。けたてけたてて其

たけ寿の大蛇となつて。天にむ

らがり。地に蟠りて池水をかへして

失にけり。

皇帝

（内十五）

かくて暮れゆく雲のあし。かくてくれゆく雲のあしただよふ風も凄く。身のけもよだつれふ。

ふぎや鏡の其うちに。鬼形の姿ぞうつりける

鉞をふりあげ斬り給へば。伽殿の

柱にちかくれて姿も見えず

失せにけり

ふぎや曇る空

晴れて。宮中光りかがやきて

鳴動することおそろしけれ

大癒

抑是は。武徳年中に贈

宮せられし。鍾馗大王の。精霊な

り。扨も汝君寵愛し給ふ。貴妃の

やまひをたひらげんと。通力を

もつて奇瑞をあらす。南無天形
星王。我鍬降魔と。秘文をと
なく駒に乗じ。虚空を翔つて
乗内せり
悪鬼は足を見る
よりも。悪鬼は足をみるよりも
驚きさわぎ。彼まき柱にかく
れけるを。鍾馗の精霊馬より
あり立ち利鍬をひつさげ扶を
かぶり。冑を鎧にむかび給へば。鬼神
の姿は。かくれもなし
鬼神
は通力自在も失せて。鬼神は通
力自在も失せて。起きつまろび
つ。はしり出るを。追つめ給へば
殿を乗びひり宮の玉階に。老
あがるを。のがさじ物をそりきおろ
し。利鍬をふりあげつたつたに

きりはなし。庭上になげすて

忽ち。貴妃も息災狂氏君の。めぐみとあふぎ。身の祟りとなる

べしと。玉体を拜しだてまつり

玉体を拜し。だてまつりて。姿

は夢とぞ。なりにける

（丙十五）

山姥

ゴよ。聲ガ多の。怪に聲のし

でうつは。ゆるばかわざなれ

や。都に帰りて世がたりにせ

させ給へと。思ふは物も妄執が

ただうち捨よ。仏事もよし。是軍

の。山姥が。山廻りするぞ。若しき

あし。野の。山めぐり。一樹の

陰。一河の流。みな是。他生の縁ぞかし。まして。我名を。月の。保世

をめぐるひとふしも。狂言綺語の

道すぐに。讃佛乾闥婆の因そかし。

短地

●仕舞

あら。恐名跡をしや。いとまやて

帝る山の

実は指に浸くかと俤

し

花と素ぬて。山めぐり

はさやけき影を素て

かたにと山めぐり

時雨の雲の

雪をきそひて。山

めぐり

めぐりめぐりて。物思を

離れぬ。妄執の雲の。塵つも

つて。山嶺となれる。鬼女が有様

見るやみるやと。峯にかけり

谷に響て。答返にあるよと

見えしが山の山に。やまめぐり

山のやまに。山廻りして。行べも

しらず。風にけり。

合

●合

水茎

四九

氷室

（内十六）

いひもあへねばあられて。寒風（カゼ）に松聲（マツヒヾキ）

にこゑたてぬ時ならぬ雪は降りおり

ちぬ河草木をしなべて。氷をしきて

ろりだんに。なるとぞ思へば氷室守の

落氷をふむとゑえてむろのうち

に入りにけりひむろのうちに入りて

けり

りその。舞の袖こそ。ゆるぐなれ

はらぬや。氷室の山のふかみどり

雪をめぐらす。舞の袖かな

りなき。虎代の老りもあま堅す。

ひむろの虎調。そなへなり

べよや。そなへよや。さもいさぎよ

き。みなそこの

はほのかげより

山河も震

動し天地もうごきて。氣風しき
りに。肝をつづめて。紅蓮大紅蓮
の。氷を戴く氷室の神鮫さえ
かがやきてぞ顯れたる。谷風
水邊さえ凍りて。谷風水邊さえ
凍りて月もかがやく氷のおも
て萬境をうつす。鏡のごと
く瀟洒たるを吹きはらつて

落ち水ぶかき谷の戸に。雪はし
ぶき。あられはよそぎりて岩もる
水もさざれ石の。ふか井の氷にそ
ぢつけらるるを。引はなし引はな
し。うかひ出たる氷室の神鮫あ
君の。みづきなれや。かしてき
君の。みづきなれや。彼をおさむ

●仕舞
らさむや。ひややかや。舞働
君の。みづきなれや。かしてき

るも氷。水をしづむるも氷の日に
（地）ナ放　（ヲ）ムスビアシライ　（ヲ）ムスビ段ル　（ヲ）ウケ　（ヲ）ナ切　（ヲ）ナ切　（ナ）ナ切

添べ月にゆき。そらを傍たる氷
（初段）ナ放　（ヲ）ウケ　（ヲ）ナヲロシ　（ヲ）二段ナ放

の物の使へ。そなへ給へや。そなへ
（地）スキ地　（地）ル地　（刺三）ヌク地

給へと。彩女の彩の。雪をめぐら
（地）ナ放　（地）ヲ　（ヲ）ムスビアシライ　（ヲ）ムスビ段ル

す小忌衣の。袂に添べて。蔭氷を
（ヲ）ウケ　（ヲ）ナ切　（ヲ）ナ切　（二段）ナ放　（五段目）ナヲロシ　（ヲ）ナ放

ぐだくなくだくな。とかすなと
（地）スキ地　（刺）ヲ　（地）キザミ　（地）ル地　（地）ヌキ

かすなと氷室の氷は。氷をしゆ
（シカケ）ムスビアシライ　（ヲ）ムスビ段ル　（ナ）ナ切　（ナ）ナ切

でし。日影をへだて。氷をそそ
（ヲ）ウケ　（ヲ）ナヲロシ　（初段）ナ放　（二段）ナ放

ぎ。清風を吹して。花の都へゆ
（地）スキ地　（刺）キザミ　（シカケ）ムスビアシライ　（上）ムスビ段ル　（ヲ）ナ切　（ヲ）ナ切

きをわけ。雲をしのぎて北山の
（ヲ）ウケ　（二段）ナ放　（五段目）ナヲロシ

ずはや都もゑたり見えたり
（刺四）ヲ　（地）ヌキ地　（地）ル地　（地）ヌク地

いそげやいそげ。氷の物を。そな
（地）ナ放　（地）ヌキ地　（地）キザミ　（シカケ）段ル　（ヲ）ムスビ段ル

ふる所も。慶賀の郡。捧ぐる供ぶ
（三段）ナヲロシツメ　（ナ）ナ切　（ナ）ナ切　（三段目）ナヲロシ

も。日の本の君に。清調ものて
（ヲ）ル　（ヲ）ル　（ヲ）ル　

(地)(上ヨリ)(ツヅク)精の龍吹きしをり。(太)精の龍吹きし
をり。雲となり雨となる。汝何
(寺出シ)(コイ合)草木震動し。天にかがやくいなび
(寺出シ)(ツヅケ)
かり。大地にひびく雷は。肝魂を
(チカケ)(入違)(チカケ)(ツヅケ)(チヲロシ)(ツウケ)
くらまかす。(捲)こはそも何のゆゑや
(ヲヌ)(ヲドリ)(ヲヌ)(ヲヌ)(ヲヌ)(ヲヌ)
らんこはそも何のゆゑやらん(大蘆歩返)
(ヲヌ)(ヲヌ)合ヲヌ(ヲヌ)合ヲヌ(半ケ出シ)(上半ケ入)
(後ニテ上ヨリ)(地ヲロシ)(コイ合)(コイ合)
(上ヨリ)(ツヅケ)(ツウケ)(コイ合)(コイ合)
政右指ニ合ハズ
柿是は。大唐の天狗の首領。善
(半判)
界坊こは。邪教也。あらゆるもの
(コイ合)(コイ合)(ムスビ)(コイ合)(コイ合)
しやめ可に侍坊。今更何の親
念をかなせる。失若作障碍
(地)(地)(地)(地)(地)(剣)(地長地)
有一佛。魔境と侵けり。あら痛は
(ムスビ)(高剣ムスビ)
しや。欲界の。うちにまるる業は
(コイ合)(コイ合)(コイ合)(ムスビアシライ)(チ切)(ツヅケ)(ムスビ)(チ切)
(ウケ二段)(地)(ウケ)(ノル地)
(此処ノカ)(ツヅケ二段)(モ)(ウケ)(ムスビニツヲドリチツメ)
(ヲロシ)(チ返)(チ敎チツメ)
(チ込)(ムスビ)(チ込)(チ返)(上ヨリ)(初段)(ウケ)
ちまたと。成ぬらん。ふしぎや雲
(チ込)(チ込)(チ込)(チ込)(チ返)(チ返)(ヲロシ)(初段)(ウケ)
(チ込)(ムスビ)(チ込)(チ返)(初段)(ウケ)
の。うちよりも。ふしぎや雲の。
(チ込)(チ込)(チ込)(チ返)(チ返)(チ返)(ヲロシ)(初段)(ウケ)(剣)(チ敎)
(地)(チ敎)
ちよりも。邪法を得る聲すな
(シカケ)(ムスビアシライ)(ツヅケ)(ムスビ)(チ切)(チ切)

り。本より魔佛。一如にして。元
聖不二なり。自性清淨天然うごき
なき。是を不動と名付たり。
「德和説者得大智惠。上
らたかんまん。其時虎聲のし
たよりも。其時虎聲のし
りも。剛まあらはれぜて給へば。稜迦
羅制多伽十二天。おのおの滝
魔のかを合せて。みさきをはら
ひて。お伺ひ申す。舞働 歩変返 。緑王諸天
は。ねをきぬ。緑王依天は。ねをき
ぬ。てち吹く風に。東をゝれば
玉権現。南にをゝ山。西に松
の尾和野や賀茂の。西風神か
ぜ吹きはらへば。さゝもに花行
のつばさも地におちちからも

●仕舞

つきゆみの八洲の後の立さる
とゝへてがまたそび来りぬ
るにても何にたべなる佛
力弁力今より後は来るまじ
じとゝいふ聲ばかりは虚空に響
り。玄聲ばかり。虚空にのこ
て。姿は雲路にぐりにけり。

（内十六）

船弁慶

●惡逆無道の甚つもり。神仏
祀の冥感に漏き。天命にしづみ
し平氏の一類
一門の月卿雲霞のごとく。浪にう
かびてみえたるぞや。暫く後世を
は。桓武天皇九代の後胤。平の
●仕舞 知盛。幽霊なり。あら珍しやいかに
義經。思ひもよらぬ体。彼の

聲を初めに出す命の。聲を初めに出す命の。威が況みし其あり様。
まて又義經も海にしづめんと。ゆゝ浪に浮べる長刀敵なきもべ彼の紋あたりをれ。
朝をけたて悪風を吹かけ。眼もくらみ。心もみだれて。前後をばうずろ計なり。其時義經おもはずも其時義經おもはずがず。ちからを抜き持ちうつつの人にむかはがでそく。言葉をかはし。たたかひ終へば。弁慶を隔てうちおわざにて。すかなみまづと。ねず珠さらさらと。押もんで。東方降三世。南方軍荼利。北方大威德。西方金剛夜叉。中央不動王。

大空。不動明王のさつくにかけて。祈りいのられ悪魔次第に遠ざかれば。弁慶舟にかを会せ。祈祈私を遣ぎのけみぎはによすれば狂怨霊はしたひ来るを。遮押ひ祈りのけ又引塩にゆられ流れ。またひく塩にゆられなかれて。跡白波とぞ。成にける。

（内十七）

右近

待雖 ツヨク 上手 夕顔 夕顔 数ヲ取ル

夕顔今とても彼の代の。夕顔今とても彼の代のちかひはつきぬしるしとて。彼と君の恵み。

彼なりけり。有難や。彼なりけり。有難や。彼なりけり有難や。出端越 サコイ合 後シテ上 一コイ合 すめらぎのかしこき御代を祈る なる。右近の馬場のほるを傷て。

出端スミ 脇能ナ出シ 半声 ハ ヤ ヤ ハ

花上、花にあきらかにして。雅楽
（カケ）ムスビ　（コイ合）コイ合　（コイ合）コイ合　（コイ合）コイ合　（平刺）ウケ　ムスビ

地獄の塵にまじはる神楽。和光
の影もくもりなき。君の威光
も影たかく。花もゆるがず。法
（地）手放　（刺）　（地）手放　（天地）キヤガミ

風ものどかなる代の。めでたさ
よ。地上雲りなき。天照神の惠
（カケ）ムスビ　（高刺）ムスビ　（コイ合）コイ合　（コイ合）コイ合

みをうけては。榊の宮居と顯
れ給ひ。
（コイ合ステ）コイ合ステ　（捨上）（コイ合ステ）コイ合ステ

愛にわが聖の。神の宮
（カケ）カミ　（平刺）

[illegible]に。花榊葉の。神とあらはは
（カケ）ムスビ　（地）ウケ　（平切）　（平切）

れ。曇らぬ威光と。所ときぬ
（ウケ）　（二段）ノル地　（二段）ムスビニツヲドリ

の。神もかぎりの。花ざかり。
（平返）手放　（平返）手放　（平返）ムスビ手返　（平返）手返　（平返）手返　（平返）手返　（平返）手返　（平返）手返　（初段）ウケ　（平返）手返　（平返）手返　（初段）ウケ　（平返）手返　（初段）ウケ　（平返）手返　（初段）ウケ

ぼほれかざもはなの。いと

（ヨロシ）（手切）（手返）（手放手ツメ）（手込）（手込）（手込

目をふさぎ待ち給ひ。佛の聲
の聞えなば。其時。兩眼をひら
きて。能能聞くべし。云かと
見れば雲霧。降り來る雨のあ
しおとほろほろあゆみ行道
の。木の葉をきつと吹あげて。
樹にあがり。谷にくだり。か
き消す樣に失せけり。
はちいきつちくれを生ず。
かるがゆゑに高き事をなし。海
は。ほそき流れをいとはずなに
虛空に音樂響き。ふしぎ
や虛空に音樂ひびき。佛の聲
聲。あらたに聞ゆ。兩眼をひ

らき。あたりを見れば山はす
なはち靈山となり大地はこん
瑠璃水はこれ七重寶樹となり
つて釋迦如來獅子の座に顯
れ給へば普賢文殊左右に
侍り。菩薩聖主。雲霞
のごとく。いさごのうへには施弗八
部。おのおの拜し。四ねう
せ

加葉阿難の大聲風
せり。高山より四海の花ふり
くだり。天人雲につらなり
微妙の音樂をそうす。如來
胸心の法文を說き給へば有漏
きこしめしきかな僧正甚時たち
まちに。僧正甚時たちまち

て。信心を發し。隨喜の懺。眼

て保ひ。一心に合掌し。歸命頂

礼大恩教主。釋迦牟尼佛

敬礼拜する。ほどに。俄に臺嶺

ひびき震動し。帝釈よりくだ

り給ふとゐるより。天物。おの

おのさわぎ。恐れをなしける

ぶぎ。さよ

が間に。花見城の。初那が間に

花見城の。帝釈あらはれぬ

千の魔術を。あさまになせば

有つる大會。ちりぢりになつ

てゞ見えたりける

舞働 上手込手返

帝釈洪睡。いかり給ひ。帝釈洪

睡。いかり給ひ。かばかりの信者

を。なぜ驚すとたちまちきん

んで苦を見せ給へば羽風を立て
て。かけらんとすれば。もぢり羽
にあつて。恐伏もけはねば。恐
れ多り。拜しやせば帝釈すな
はち雲路をきて。あがらせ給へ
其時天狗は岩根をつたひ下るを
ぞ見て。いはね根をつたひ下るを見
て。深谷の岩陰にぞいりにけり

とても神代の物語。委くいざ
やあらはし彼上人を慰めん
まづは岩戸の其初かくれし
神を出さんとて。八百萬の神
遊び。是ぞ神楽の始なる
千早振神楽止メコイ合
天の岩戸を
引立てて
神は跡なく入給へば。

とこやみの世と。はやなりぬ。八百
よろづの神達。岩戸の前にて
思をなげき。神楽をそうし
てまひ給へば
時にいはゝ戸を。すこしひらきた
まへば。又とこ闇の雲はれて。日
月光りかがやけば。人のおもて
しろじろとみゆる

（丙十八）

狸々

神の声。たべなる味の。物
かたり
清陽の江のほとりにて。清陽の
江のほとりにて。菊をたたへて夜
もすがら。月の前にも友侍つや。
又かたむくる盃の。影をたたへて
侍ち居たり影をたたへて侍ち居

たり（下ル端サキ上ヨク）老ぬや。老ぬや。菜の
名をも菊の水。盃もうかべ出で
て友に逢ふぞうれしき（渡リ相上）友に逢ふ
ぞうれしき。みきときく。（地上）みきと
きく。名も理りや秋風の吹け
ども吹けども。（上ヨリ）さらに身には
さむからじ。さそわりや白菊
の。さそわりやしらぎくの。著せ
わたを温めて酒をいざや酌ま
ふよ。まれびも侍ず。
月星は隈もなき。所は清陽の
江のうらのさかもり。狂狂舞
を舞はふよ。芦の葉の笛を吹
き。浪のつづみをうちうち。聲
澄み渡るうら風の。秋のしらめや
のこるらん。（太鼓中舞サキ合）有為や虎身

こころすなほなるにより仏壇に
いづみをたたへ仏今返下あたゝ
る五りよもつきゞ
よもつきゞ
つきゞ万代までの竹の塚の酒
酌めどもつきず飲めどもかはら
ぬ秋の秋のさかづき。かげもか
たむく入江に枯たつ。あしもと
はろよろと。乱れに伏したる花
の夢のぞむると思へばいづみはそ
のまま盡せぬ宿こそ。めでた
けれ。

（合ル）

白髭

（内十九）

（上地）神楽さいばらとりどりに。弁楽
さいばらとりどりに。いと竹の
やくやく秘曲をつくし拍子を
そろへて歌遊の舞楽は有難

や 太鼓樂 ナ立刺ク返シ 面白や浜舞樂 面白
や浜舞樂の。鼓はおのづからい
そ手つ浪の聲。松風は琴を
しらめじん耳をすます折から
に。あ和つみそらの雲吞かかや
きわたり。潮すいの面鳴動する
陸天燈龍燈の來現かや 出端一段 天女出る 止メ手 早笛一段 ナ立刺返 龍人出る
天地の兩燈あらわれて。天地
の兩燈あらわれて。神前にそ
なふるは炬の光り。山河草木
かかやきわたり。日歌のしよられつ
見えざりけり 舞働 ナ立刺返
かくて夜もはや
はや明方の。かくて夜もはや
あけがたになれば。おのをの明
神にいとまや。かへれば明神
も。聲をあげて。ぜんざいぜん

ざいと。感じ給へば。天女はあま
路にまた立ちかへれば。能神は御
するの。上にかけて。浪をかへし
雲をとうがちて。天地にわかれてそび
きりゆけば。あけゆく空も。白髭
の。明けゆく空も白髭の神風
流る時代そそ。成にける

（ハ）ノル地　（地）ムスビアシライ　（高刺）ムスビ段ツ　（五段目）キヲロシ　（地）ヌキ地　（地）ヌク地　（地）キザミ　（地）ヌキ地　（地）ムスビ段ツ　（高刺）ムスビ段ツ　（三段目）キヲロシ　（地）キ放キツノ　（地）キ込トノ　（地）キ込トノ　（合ツ）合ツ　（地）ツ合ツ

小塩

（内十九）

妻もまだらもまだらもまだ
てろは大系や。小塩につづく通ひ
路の。ゆく方はおなじ意味の
忘れめや今も名は昔をそこぞ
とくもりかな。むかしかなさ
昔かな。花も所も。月もはる
あ
●仕舞　りし時幸を
花も忘れど
花も忘れぬ
てころやをり塩の

（ハ）ノル地　（地）ツ合ツ　（地）ツ合ツ　（地）ツ合ツ

風吹きみだれ。散らせや散らせ

散まよふ。木のもとながら。まどろ

めば。桜にむすぐる夢かうつつか

世ひと定めよ。夢かうつつか世ひ

と定めよ。ねてかさめてか。春

の歌の月。あけぼのの花なにや

球るらん。

邯鄲

（内二十）

流れ。くめ。いやまさにいづる泉水を

のめばかん露もかくやらんと。心

も晴れやかに飛び立つばかり有

何のよるひるとなきたのしみの

栄華にも栄耀にも笑ふべや。

あるべき太鼓樂。いつ迄ぞ。栄華の春

もときはにて。狂ひくるし有何

仕舞

の月。月人男の舞なれば。雲

の羽袖をかさねつつよろこびの奇
と唱ふよもすがら。うたゝよもすがら
日は又出でてあきらけく咲りてよる
かと思へば畫になり、ひるかと
おもへば月まださやけし春の
花さけば紅葉も色濃く夏
かと思へば雪も降りて四季
をりをりは月のまへにて。秋夏

秋の野に千草の。一日に花さ
けり。面白やふるきやなかくて時過頃
くて時過頃されば。かくて時過頃
されば。五十年の。栄華もつきて
儚は夢の。中なれば。皆きえき
えと果てて。有つる郡の柩の
うへに。眠の夢は。覚にけり。

唐船

（内二十）

時刻をうつさずいとまにて

唐人は。船よ取り乗りをし出

す。祝びの飾りにや。楽をそうし

ふなぶぐも。棹のさす手も舞の

袖。打から浪の鼓の舞がくにつれ

●住舞

て面白や 太鼓楽 ●陸には舞楽に乗

じつつ。陸には舞楽に乗じつつ

名残おしてる海づら遠く。帆ゆく

ままに。拍子も遅風。船には舞の

袖のは風も。遅手とやならん。帆

をひきつれて。舞まぜ。ほをひきつれ

て。船まぜは。祝びいさみて。もろと

しさしてぞ。急ぎける。

都にあり神勅を。都にあり

神勅を。慈く奏し上ぐべしと。い

（内王一）

弓八幡

べばおゆも音楽の風えて異香薫
ず也。笑あらたなる。寄物外笑あ
らたなる寄物かな。出端越ヨイ合
もとよ
りも人の國より我國。他の人よ
りも我が人を。恋ひの事も明らけき。
眞如実相の槻弓の。心百重作に至
る迄。動かず絶ず君守るかわ良の
神とは我が事也。地上きさらぎの初
卯の神楽おもしろや。
うたへや
うたへ。日影さす迄。袖のしらゆ
ふ返すがへすも。千代の聲聲。うたよ
とかや。神舞 ヨ返謡又ヨ切
聲そへて。教教の。しやうちやくき
んくで。孤雲の外に。たち滿て。蘿
日の紅は。蘇命。路の山をうつして。

羽衣 (内二)

みどりは波にうき鳥がはらふ風に

花降りて。雲を廻らす白雲の袖

ぞ妙なる。南無歸命頂天子。本

地大勢至。李遊びの舞の曲 太鼓序舞 歩謠カケ

あるひは。天津みそらのみどりの衣

又は素たつ霞の衣。色香もた

へなりし女の裳。さりみさ。さゆふ

鶴の。花をかざしの。あまのは袖

●仕舞 メ舞ヲ上に破無は手ヒず

なびくもかへすも。舞のそて。破舞 東

あそびの。かずかずて。東あそびの

かずかずて。そ名も月の。色びと

は。三五夜中の。そらにすまんぐわ

つ。眞如の影となり。ぶに圓滿國土

成就。七寶。充滿のたからをふら

國土に是を。ほどこし給ふ。去ほど

に。晴うつて。天の羽衣。浦風にた

なびきたなびく。三保の松原うき
鳥が雲の。あしたかやまや富士の高
嶺。かすかに眺りて。天津みそらの
霞にまぎれて。失にけり。

（丙二十一）

龍虎

さても不思議や山人の。数のまま
にぶ路を分け。竹林を遥かに過ぐ
せば。煙霧朦朧として夜の色
を侵す。風枝蕭蕭として。秋の
聲より凄しや。あれあれ嶺
より雲起り。あれあれ嶺より
雲起り。俄かに降る雨の音
鳴神稲妻天地に輝く光のう
ちに。現れ出づる。金龍の勢。遠か
に余所目も眩を消し。身の毛
もよだつばかりなり。

かくて悪虎、竹林に覆ひ、かくて悪虎、竹林に覆ひ。おほひかくして悪虎、竹林に覆ひ。おほひかくるとんえつるか。竹林の岩洞に籠もる虎の。顕れ出づれば岩屋の内より悪風を吹き出だし。方に雲を吹き返し。かたきを遮まじきほひいさむ。おそろしかりける。氣色かな

かかりける所に。かかりける所に金龍雲より降り下りて。悪虎をとらんと飛んでかかり。龍のたたかひ。隙もなし。舞働一段 以下相手合なず

本より虎乱のいきほひたけく。本より虎乱のいきたけく。左も右も。鋭のごとくに作を巻かんと。覆ひかかるをそむけて。枝を折て。金龍にかかれば。悪虎迫つめ食はんとすれば。金龍雲中

に遠にのぼれば。悪虎は勢ひ嚴に

あがり。はるかに人をくり。愛念のい

きほひあたりをはらひ。竹林に飛び

かくり。また竹林に。花帰て。そま

ま岩洞に。かくれけり

菱上

（内二十二）

計

ワキ上

行者は。かく持に来らんと。後の行

ゑの跡をつぎ。脇金両部の

峯を分け。七寶の露をはら

ひ。條懇に。不淨を隔る悪辱の袈

裟。赤木の珠数のいらたかを。さら

りさらりと押しもんで。一祈てそい

のつたれ。曩謨三曼陀傅日羅敵

祈三段

「いかに行者。はや帰り給へ。かへらで

ふかくし給ふなよ」とひいかなる

悪霊なりとも。行者の法力盡くべき

かと。重ねて珠数を押しもんで

輪藏

（内二十二）

月はくまなき後歌の鏡。聲
澄み渡る折節に ふぐや
異香薫じつつ。音楽聞え雲
たなびく絶まより。花降りくだる
ぞあらたなる いひもあべねば
数珠の。いひもあべねば数珠の

等覆神の。厨子のさびらはたら
まち四方へひらけて。傳犬士二童子
あらはれたり
釈迦一代の。説法の書箱。
釈迦一代の。説法の書箱を
彼の上人。悲くあたへんと
晉建晉。所の。二童子に持たせ。上人
の御まへに。立ち並び。傳犬士
座を立つて。傳犬士座を立つて

作樹にすがり。勝をかがめて。上人
を祇し。彼岸經を。讀誦し給へは
善がなれや。善がなれそ。夜遊
を奏して。舞ひ給ふ樂。歩返
れも妙なるまひのそで。いづれ
も妙なるまひのそで。月も照りそ
ふ。雲間より。天部の姿は隠もなく
天降りそ。有難けれ。是は
釈迦一代の藏經の守護。神。十二天
のそうちに。火天の姿を。顕はす
なり。火天忽あまくだり。火天
忽あまくだり。猛なく目前にあ
らはれ出でて。上人に向ひ。則結縁
の。行道の利益。めぐらし給へとお
のおの立ちより。上人をいざなひ。輪
乗に侍手をかけまくも。辱しと

至に押しめぐり。廻りめぐるや。日
月の光。雲らぬ。仏法のあらたさ
「よ」舞働 丹後道
見はこれ妙経の守護神な
れば。見はこれ妙経の守護神な
れば。歌のまに〻〻。儀式をあ
らはし。上人をとどこく。拔見の手後
各仏菩をとりどりに。はるかの神
祇にはこび給ふ。傳犬ゼ伴ひ。神祇
につみ置き。孫當社。當寺の仏法
繁昌の霊地を。崇め給へと上人にを
しへ。天部はくも升にあがらせ給
へば。七宝荘厳の瑠璃の座の上
に。傳犬ゼ二人の童子を伴ひ傳
犬ゼ二人の童子を伴ひ。かくり給
ふ。有難き

終

寐覚

（外一）

勅使しばらく待ち給へ。月の夜もすがら。音楽を奏し

給せやし。又唐薬を奥へんと云

ふかとつれば老翁曰。名陰に寄

ると見えて行方知らずなりぬ

けり行方も知らず失せてけり。

（下り端ヤ出シ）

（下り端サ変）天つ風。天つ風。雲の通ひ路

次きとぢよむ女の衣いろいろで。恐
竹も音を添へて。彼の鼓聲澄む
や。海番楽を奏しけり 天女舞 ナ
後シテ 上ウケ うもうもこれは。醫王佛の化現。
無病息災の方便のため。三歸の
翁姫に現れ出でたるなり
うの時老翁そぼろを開きぞの
時老翁そぼろを開き。番天遍
かで。渡しければ 東南に雲
晴れ。西北の風も。次きをさまる
て。花降り異香。音楽の響。舞
楽の数数乙女の袂。返す返すも
面白や 太鼓楽 序ノリ
夜遊の舞楽も
時過ぎて。夜遊の舞楽も時過
ぎて。有明の方の。月も落ちくる
折柳に。帝王儀や。彼はげし

く荒れて。二龍の姿は。現れたり

（ヲロシ）（手返）手放 ヤツノ（手込）（ヤツノ）（手込）手放 ヤツノ（手込）（ヤツノ）（手込）以下相手に合はず（手込）ムスビ手込

（初段）ウケ（段）（手返）ノスビ手込（手返）手返（初段）ウケ

曇（段）歩手返手返 地 上 ヤ 両龍又は川彼に深ひ。ヤ 両龍

（ヲロシ）（初段）ウケ（手込）（手返）（手込）（ムスビ）手込（手込）手込（初段）ウケ（手込）手込（ヲロシ）

地 手放

王は川彼に深ひ。彼の市茅を。捧

（刺）（手返）手放（ヲロシ）ムスビ段ス（手切）（手切）

（シカケ）ムスビアシライ

ぐる氣色。仰て座してゞ。見え

（ヲロシ）手返（手込）（手込）（手込）手込（手込）手込（手込）手込

と。明け方の空で。夜もすがらし
らと。明け方の空で。夢の寝覚
は。醒めてけり

（外一）

江野鳥

彼伯が絶技をききてあげ張儀
が英聲を後に馳す。これ聰明勇
進辨才天の無量無邊不可思
議の功徳を。様様現「お」はし
ますの出端に。斗藪かけ
ば。思も照り添ふ如意
の寶珠の。光を進か。俤がさる
と聞く時は。今この君の
れと。影に。あひ「に」あ
ば。なほ。忘の如し
俤げなる。俤げなほ
和が玉も。なてなら
寶珠と。君に捧げんと光もかか
やく。殿の龍。左右に開けて十

五童子。天部の御姿。現れたり

（初段）ウケ　（手拍）ムスビ手拍　（手拍）手放ヤツノ　（ヲロシ）手放ヤツノ　（手拍）ムスビ手拍　（手拍）手放ヤツノ　（手拍）以下相手と合ヒナ

（初段）ウケ　（手拍）ムスビ手拍　（手拍）手放ヤツノ　（ヲロシ

角きしに養らぬ因位の形。角
きしに養らぬ因位の形頭は
五頭龍胴脊の腮。眼に白目を
つなぬきぷろの牙に星雲をまつ
へり。若むすれも型べ使す巌の
俄俄たる上にて現れたる舞働

●仕舞
●獨吟

神佛水波の隔てなり
水波の隔てなれば。因體の。利
益もさまざまの。雑ガ天部は威
光を現し明神諸共に百千劫の
齢を守らんと約束堅き。岩間を
傳ひ流れ。緑の海に。龍
行雲巻くば。波も龍の口
の。明神忽ち威を揮ひ雲を吹
き嵐にかがやく眼の光は天地に
充ち満てりその時天部は喜子

を伴ひ紫雲の上に現れ給へば
羽神立ちくる鈴音に紫の光
を放つて鳥根を廻り廻るや
皆〻が狂はそりそり姿と雲中
に現しそりそり姿と雲中に現
すもげに有難き影向かな

（外一）

代主

謡ヲ聚

もも〻に澄む月の光さやけき夜
神楽の声も同じ松の風更
け行く空ぞ静なる
空ぞ静なる嶺越
あら有難
のをりからやなほれ初より
この山に住んで玉城を護る事
代を祭め天下泰平の寶の山
葛城の神と現れて只今ここに

来りたり。あら面白の狂迷や

な 標結ふ。菖蒲の城山に降る雪

はら 問なく時なくもほゆる

かな 忍れはみ谷の深雪の空

忍れは卯月。卯のはなの雪

雪を廻らす舞の袖。古き大和舞

指ふと撫で。おもしろや 神舞

今は何をかつつむべき。われは知らず

やこの寺の 大聖殊の御前な

御身信心儒浄の。心を感じ来

りたりと。云ひ捨ててうの姿

松の木陰に失せにけり松の

木陰に失せにけり

出端 久方の。雲居に渡る橋立

は。天つ市空の。市階かな

月も更け行く天の原。月も更け

行く天の原。雲雲雲雲雲異香薫

ど。天つ女の雲の羽袖。光も

なるべ燈を掲げ。松の梢に

天降り。天降る。かかりければ龍

宮より掲ぐる燈の光。海上に

ほんでてたる粧。あらたな

りける出現かな

本光あまねき燈の。龍宮の

内裏を。照す五り

日月燈明佛。空には日月

燈明佛。又下界には龍神の燈

火。朝に揺られ深き沈めども

光はいとど。かがやきあがりて

天地の兩燈つにて合ひ。九世

の戸の明け方。明明たり。舞働 ヰ文ヰ迄

●住舞●固より龍神は龍行自在に

固より龍神は龍行自在

て通力遍満の奇様を見せん

と。平地に波瀾を起しつつ。海

山虚空に光びかけつて。嵐を

跳立て。雨を起して降き曇り

降き曇り震動すれども燈

の光は。暗らかに。なほ燈み昇

るや。大つ小女の姿も雲居に入

らせ給へば又龍神は。波を跳

立て。逆巻朝の廻ると共に。逆

巻く朝の廻ると共に。引かれて

波にて。入りにける。

逆髪

（外一）

待望 ヰ上ヰ 幕。はわその紅葉かたしきて

（鼓ヲ取）はわその紅葉かたーきて。袞に
（太）
かりぬの袍より。音樂客へ花ふ
（吉ヒシ）（吉ヒシ）（カニ）（カニ）（元）（吉ヒシ）（吉ヒシ）（元）
りて。異香くもむずる。ふーぎきよ
（ヤ）（ヤ）（ヤ）